

令和 6 年 9 月 30 日現在

機関番号：14301

研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化(A））

研究期間：2021～2023

課題番号：20KK0287

研究課題名（和文）世帯内に隠れた貧困：国際共同研究を通じた実証的把握と貧困把握の新たな方法論の構築

研究課題名（英文）Hidden Poverty within the Households: Empirical Data Analysis and New Methodologies for Understanding Poverty through International Collaborative Research

研究代表者

丸山 里美（Maruyama, Satomi）

京都大学・文学研究科・准教授

研究者番号：20584098

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 5,200,000円

渡航期間：10ヶ月

研究成果の概要（和文）：英語圏では、貧困研究の分野において、世帯を一体のものとはせず、そのなかでの資源配分を把握しようとする研究群が存在している。最近では、従来の世帯を単位にする方法ではなく、個人を単位に貧困を把握する方法が開発されており、これらの研究の系譜と到達点を整理した。一方、日本においては、世帯内の資源配分を把握しようとしていたのは、過去の家計研究だが、貧困研究とは結びついていない。これらの研究の系譜と到達点を確認し、日本の世帯内資源配分の実態とその研究の特徴を、国際的に位置づける作業を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

貧困研究においては、世帯を単位に貧困が把握されることが一般的だが、女性の貧困はそれでは見えなくなってしまうがちであること、その問題を解消するために、新たにどのように貧困を把握できる可能性があるかについて、日本ではほとんど知られていなかった。世帯内における資源配分の不平等を把握しようとする本研究は、世帯を単位にしてきた従来の貧困研究の方法論を刷新する可能性を持ち、貧困概念やその捉え方をジェンダー視点から豊富化させる理論的観点からその重要性を位置づけることができる。くわえて、見えにくい女性の貧困の実態を可視化させることにつながるものである。

研究成果の概要（英文）：Unlike the general method of measuring poverty on the basis of household unit, new methods have been developed to open the black box of the household and understand the distribution of resources within the household, or to understand poverty on an individual basis. In Japan, on the other hand, it was household research in the 1990s that attempted to understand resource allocation within the households, but these studies were rarely linked to poverty research and have not been updated to recent global research trends. This study reviews the development and reach of these studies and internationally situates the realities of intra-household resource allocation in Japan and the characteristics of research on these issues.

研究分野：社会学

キーワード：貧困 ジェンダー 世帯内資源配分

1. 研究開始当初の背景

2000年代以降、貧困が大きな社会問題になっている。この貧困はジェンダー化されているが、女性の貧困については、女性世帯主、すなわち母子世帯および若年単身女性を対象にした研究がほとんどで、それ以外は非常に乏しい状態にある。

このことの一因は、貧困の量的把握やそれにもとづく議論が「世帯」を単位に行われてきたことにある。たとえば貧困把握の方法としてもっともよく知られた相対的貧困率は、「等価可処分所得の中央値の50%」という貧困基準によって算出されるが、このとき所得は世帯単位で把握されている。つまり世帯のなかでは資源が平等に分配されていることが前提になっているのである。この前提によって、男性世帯主とともに暮らしている限り、女性の所得の少なさは覆い隠されてきた。しかし実際には、夫から必要な生活費を渡されていない経済的DVの状態や、母親だけが他の世帯員より生活水準が低いというような「世帯のなかに隠れた貧困」も起こりうる。これらは、世帯内資源の不平等に起因する貧困といえることができる。また離婚や別居をすればすぐに貧困に陥るといって「貧困リスク」の高い既婚女性も少なくない。しかしこのような婚姻している世帯のなかで見られる貧困状態は、貧困の把握が世帯単位で行われている限り、問題として可視化されることはほとんどなかった。

よって、女性世帯主世帯だけではなく、既婚者に見られるものも含めて、女性の貧困の全体像をとらえるには、世帯内の資源配分の実態に焦点化するとともに、上記のような問題を可視化することのできる新たな貧困把握の方法を開発する。またその背後にある貧困概念についても、同様の視点から再検討する必要がある。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、第一に、世帯を単位とした従来の貧困把握の方法では見えなくなってしまう世帯内に隠れた貧困と、その原因となる世帯内資源配分の不平等の実態を、実証的に把握することである。

(2) 第二の目的は、従来の貧困研究の方法と、その背後にある貧困概念を、ジェンダーの視点から問い直す理論的検討を行うことである。女性が世帯内で経験している不平等とそれゆえに生じる困窮状態を把握するためには、世帯単位で所得を把握するという従来の貧困研究の手法を超えて、個人単位かつ貨幣にとどまらない生活の把握と、その背後にある貧困概念を再検討する必要がある。

3. 研究の方法

(1) 第一の目的については、「消費生活に関するパネル調査」のデータを分析することによって、日本における世帯内資源配分の不平等の実態と、それにより生じる世帯のなかに隠れた貧困を実証的に把握する。その際、こうした方法について長く検討してきた Glasgow Caledonian University の Sara Cantillon 教授と共同で行うことで、世界的にも類を見ないデータソースである本パネル調査のデータの分析可能性を最大限に高めるとともに、国際的レベルの研究に発展させる。

(2) 第二の目的については、貧困を把握する方法について、ジェンダー視点から検討した英語圏の研究、およびその背後にあるジェンダー概念に関する英語圏の研究を渉猟し、検討を行う。

4. 研究成果

(1) 日本において、世帯内資源配分の実態を把握できるほぼ唯一の量的データである「消費生活に関するパネル調査」について、同様の他国の調査と比較することができるよう、類似した英語圏の複数の調査との異同を検討した。その結果、本調査は、国際的にみてもユニークで、他に類を見ないほどデータの豊富なパネル調査であるが、家計管理方法の分類などが他国で行われているものとは異なり、簡単に比較をすることはできないことがわかった。そのため、「消費生活に関するパネル調査」と他国の類似する調査の異同を整理するとともに、今後新たに分析する必要がある変数を選定するなど、この調査を国際的な文脈において分析するための基礎的な作業を進めた。

また、本パネル調査を、どのように分析をすれば意義があるのかを検討するために、日本と英語圏の世帯内資源配分研究の現状とその到達点について整理した。日本において世帯内資源配分の実態をとらえようとしてきたのは家計研究の分野であり、貧困に関する視点は弱いこと、最近ではこうした研究自体が行われなくなってきていることが確認できた。また、こうした研究群のなかから、世帯内資源配分の不平等と、世帯のなかに隠れた貧困の実態を知ることができる研究を選別し、その到達点を確認した。一方、英語圏、特にイギリスでは、世帯内資源配分研究は、貧困研究を密接に結びついて発展してきており、その到達点を整理した。そして、日本の研究と英語圏の研究を対比させ、日本においてどのような研究が行われる必要があるのかを検討した。そして上記をまとめて、日本の世帯内資源配分の実態と研究の特徴を、国際的

に位置づける作業を行い、英語論文として出版した。

(2) 貧困を把握する方法として、従来は世帯単位で所得を把握するものが主流だったが、英語圏では、ジェンダーに敏感な視点から貧困を把握する方法が、さまざまに開発されていることがわかった。たとえば、世帯ではなく個人を単位として、所得ではなく、剥奪指標を用いて生活水準を把握するという方法や、貧困を所得だけではなく、教育、健康等多様な面から把握する多次元貧困指標のなかでも、ジェンダーに敏感なもの (Individual Deprivation Measure) や、所得と時間を交換可能なものと考え、貧困測定に時間の視点を組み込み、無償のケア労働を含めて貧困をとらえる時間-所得の貧困の方法などがあるが、いずれも日本ではほとんど知られていない。よって、これらの内容を整理し、世帯内資源配分に焦点をあてる貧困研究の可能性とその意義について理論的整理を行い、論文執筆や学会シンポジウムにおいて報告を行った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 丸山里美	4. 巻 828
2. 論文標題 世帯のなかに隠れた女性の貧困	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 We learn	6. 最初と最後の頁 4-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 丸山里美	4. 巻 59
2. 論文標題 世帯のなかに隠れた貧困 ジェンダーと世帯内資源配分に注目して	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 生活経営学研究	6. 最初と最後の頁 11-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 3件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 丸山里美
2. 発表標題 世帯のなかに隠れた貧困 ジェンダーと世帯内資源配分に注目して
3. 学会等名 日本家政学会生活経営部会夏期セミナー（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 丸山里美
2. 発表標題 世帯のなかに隠れた貧困とジェンダー
3. 学会等名 社会福祉学会関東部会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 丸山里美
2. 発表標題 世帯内資源配分からみる貧困
3. 学会等名 貧困研究会（招待講演）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Siobhan, A., Silvia, A., Bennett, Maruyama, S., etc	4. 発行年 2024年
2. 出版社 Edward Elgar	5. 総ページ数 264
3. 書名 A Research Agenda for Financial Resources within the Household	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
主たる渡航先の主たる海外共同研究者	カンティロン サラ (Cantillon Sara)	グラスゴーカレドニアン大学・WiSE Centre・Professor	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
その他の研究協力者	ミシェル ブーン (Boon Michele)	グラスゴーカレドニアン大学・Department of Nursing and Community Health・Lecturer	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
英国	Glasgow Caledonian University			